

ニホンジカの第 I・II 期(2003～2011年度) の「特定鳥獣保護管理計画」のモニタリング



ライトセンサスで発見したオスジカ



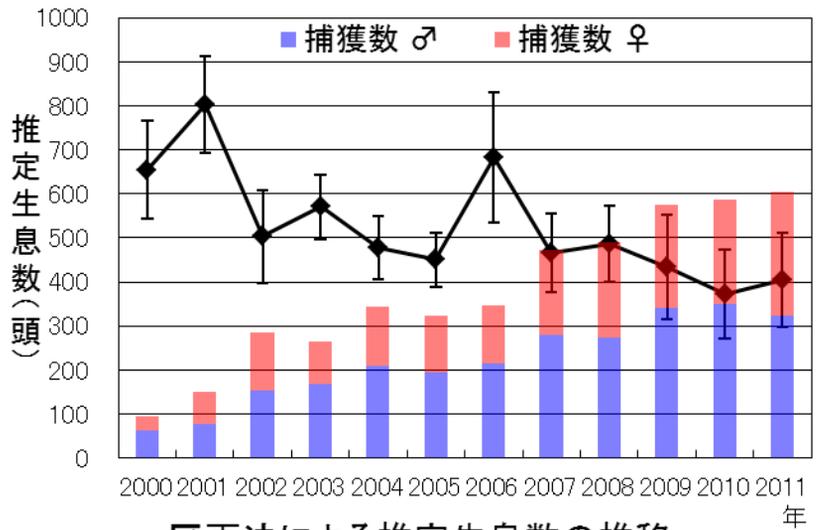
ライトセンサスで発見した母子グループ



ヒノキへの角こすり剥皮害

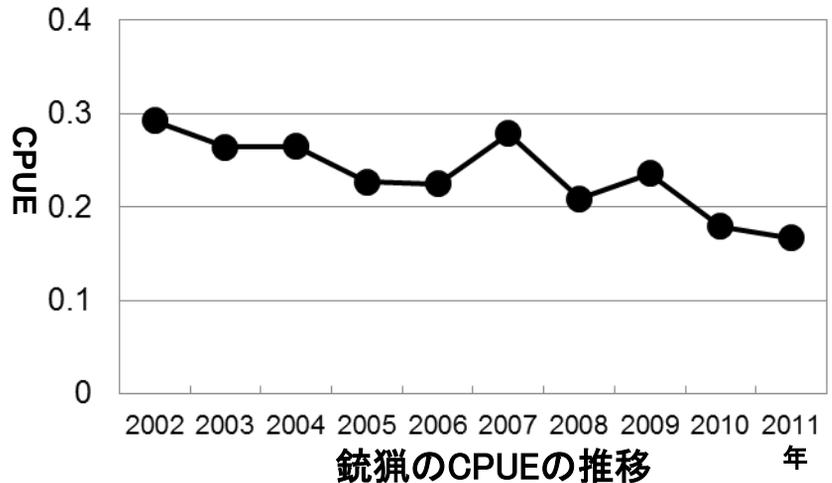
出雲北山山地での生息環境と生息数は？

出雲北山山地での生息数は、区画法によると2001年の約800頭をピークに減少傾向にある。ただし、捕獲数からみると過少値になっている。そのため、ベイズ法によって、2010年末の生息数を1,380頭(中央値)と推定した。



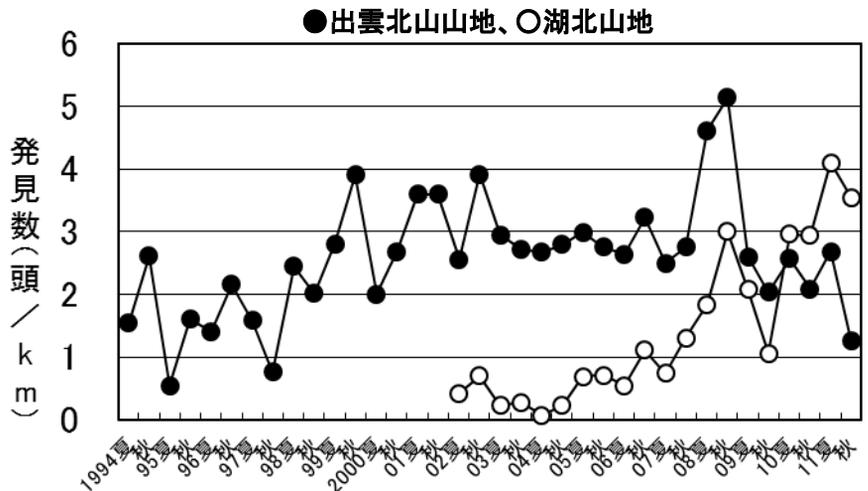
区画法による推定生息数の推移

銃器によるCPUE(ハンター1人1日当たりの捕獲数)も2001年をピークに低下傾向にある。すなわち、生息数の減少傾向が伺える。



銃猟のCPUEの推移

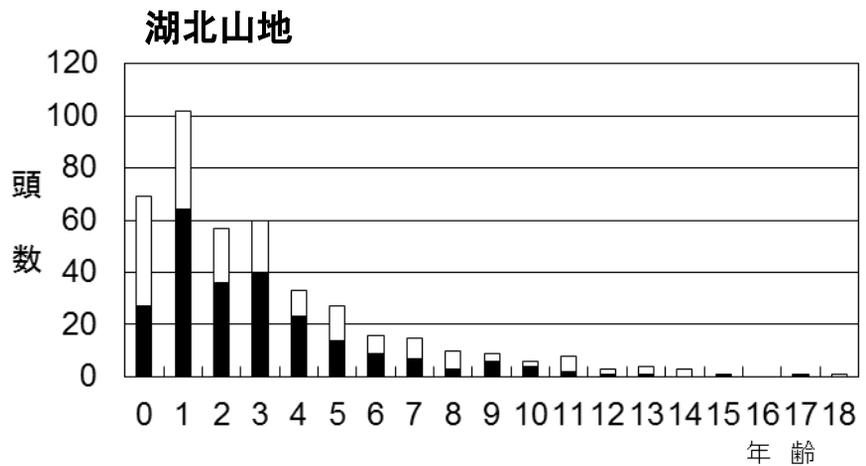
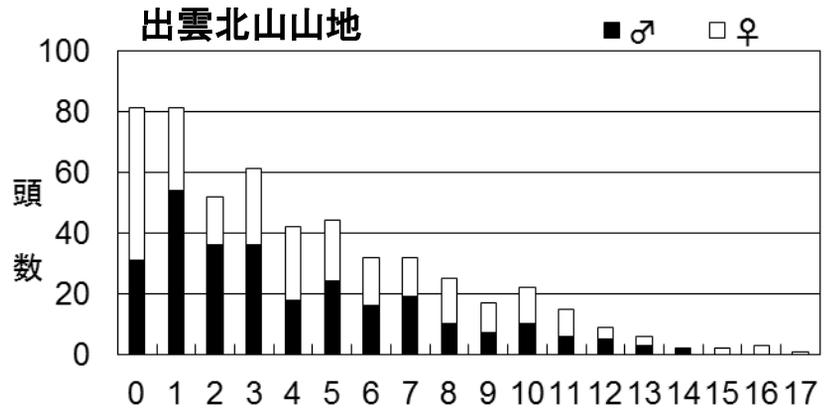
ライトセンサスによる発見数も2000～2003年頃をピークに減少傾向にある。一方、湖北山地での発見数は増加傾向にあることから、捕獲対策の強化が必要である。



ライトセンサスでの発見数の推移

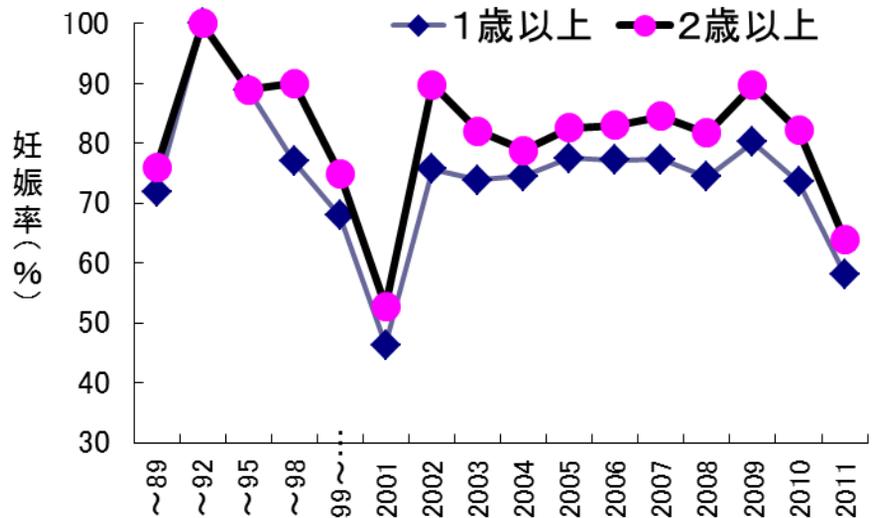
捕獲個体の年齢構成・妊娠率は？

2011年の出雲北山山地の捕獲個体の年齢は、0～17歳、平均年齢4.2歳であり、1歳以下の若齢個体が27%を占めた。一方、湖北山地では、0～18歳、平均年齢3.2歳、1歳以下が38%と若齢個体の割合が高かった。これは、生息数が近年増加している個体群の特徴を表していると考えられる。



捕獲個体の年齢構成

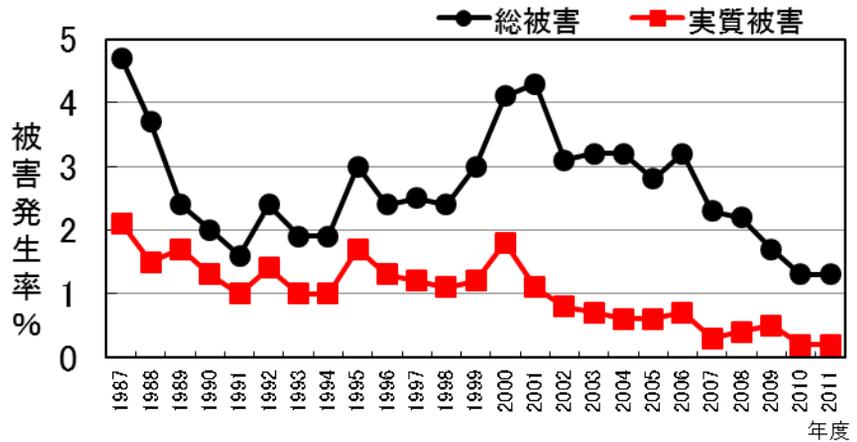
出雲北山山地での妊娠率は、2001年までは低下傾向であったが、2002年以降は上昇した。これは個体数が減少したことによる餌環境の良好化が影響したと考えられる。ただし、2011年に低下した理由は不明である。



妊娠率の推移

被害の発生状況は？

角こすり剥皮害の発生率は、2001年までは4～5%と高かったが、2002年以降は減少傾向であった。また、健全木を新たに加害された実質的な被害率は、0.5%以下と少なかった。



角こすり剥皮害の発生率の推移



ヒノキへの角こすり剥皮害



スギ幼齢木の枝葉摂食害



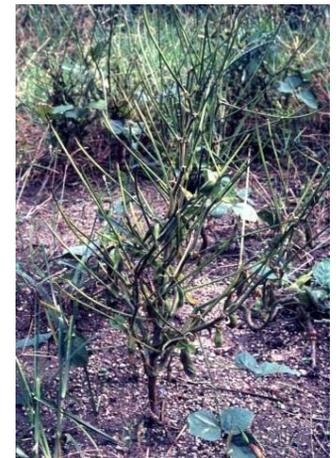
スギへの樹皮摂食害



タブノキへの樹皮摂食害



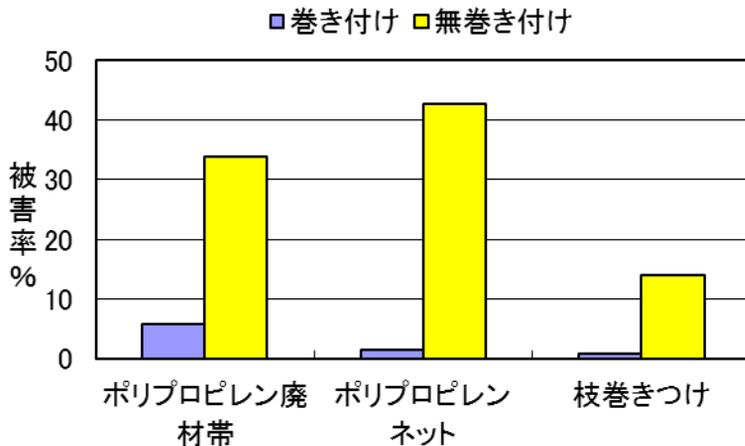
タケノコの食害



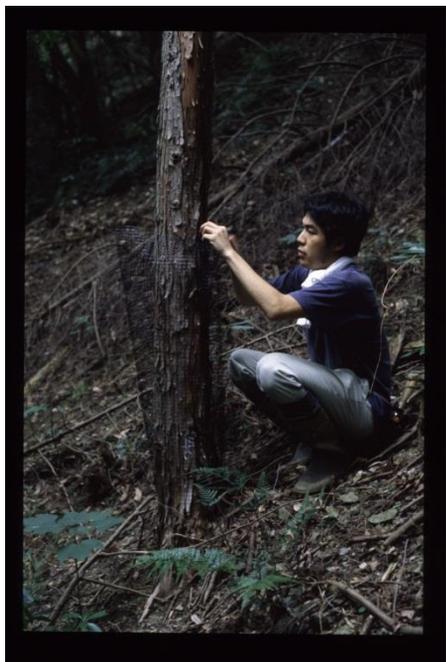
葉を食害されたダイズ

効果的な角こすり剥皮害の回避策は？

角こすり剥皮害を回避するためにポリプロピレン廃材帯、ポリプロピレンネット(バークガード)および間伐した枝を樹幹に巻き付けるのは有効であった。ただし、樹幹直径に対して大きく巻くことや、すべての木に巻かずに既被害木や間伐予定木は、シカの角こすり用に巻かずに残しておくことが回避効果を高めるには重要であった。



角こすり剥皮害の回避効果



ポリプロピレンネット
(バークガード)の設置



ポリプロピレン
廃材帯



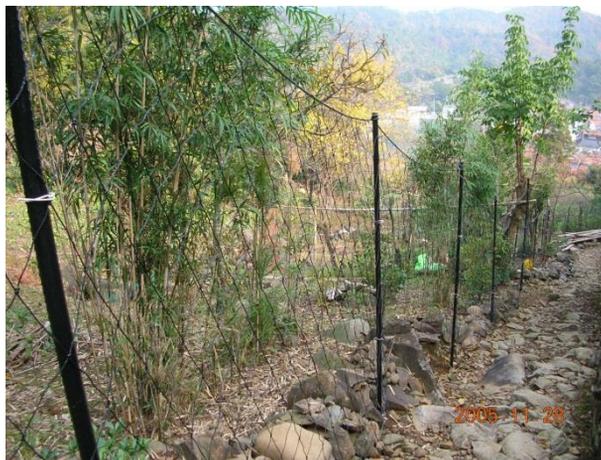
間伐木の
枝巻き法

田畑での食害防止対策は？

田畑での食害は電気柵，ステンレス線を編込んだネット柵および金網フェンスの設置が有効であった。ただし，電気柵は1.5m，ネット柵と金網フェンスは2mの高さが必要であり，また定期的な維持管理を実施しないと効果が低下した場合があった。



金網フェンス



ステンレス線を編み込んだネット柵



シカとイノシシに対応した電気柵

ニホンジカの保護管理と被害対策には，適正な個体数管理と効果的な各種の被害回避策を組み合わせた総合対策を実施していくことが必要。